

不登校児童生徒の学校復帰支援に関する調査と その支援システム

A Case Study of Reinstatement Support from School Truancy of Elementary School and Junior High School Students

嵩下 里菜, 佐々木 整

Rina DAKESHITA and Hitoshi SASAKI

*1教育システム大学情報学研究科

*1Graduate School of Informatics, University of Educational Systems

拓殖大学

Faculty of Engineering, Takushoku University

Email: rinadakeshita@st.eitl.takushoku-u.ac.jp

あらまし：教育現場には、いじめや体罰、不登校など様々な問題がある。不登校問題は特に大きな問題の一つであるが、不登校になる児童生徒は年々増加している。文部科学省は、不登校特例校や適応教室の設置など様々な支援を行っているが、学校復帰はなかなかスムーズにはいっていない。今回、八王子市に設置されている適応教室ではたらく教員及びサポーターにアンケート調査を行い、不登校児童生徒の学習時における問題点と実際に行われている支援について調べた。その調査結果と現在開発中の支援システムについて発表する。

キーワード：不登校 学校復帰 教育工学 学習意欲 小中学校教育

1. はじめに

文部科学省のデータ⁽¹⁾によると、平成30年度小中学校における不登校児童生徒数は164,528人と過去最高となった。文部科学省ではそのような児童生徒減少に向け、不登校特例校・教育支援センター

(以降適応教室と呼ぶ)の設置、学校づくりの見直し、学校・家庭・地域社会の連携など様々な支援を行なっている。しかし、不登校児童生徒の持つ問題は学習不振や心の問題だけではなく、学校復帰支援は一筋縄ではいかない。

今回、適応教室ではたらく教員及びサポーターにアンケート調査を行い、不登校児童生徒の学習時における問題点と実際の内容について調べた。また、現在開発中の支援システムについてまとめる。

2. 背景

不登校特例校は、特別なカリキュラムを組むことが許可されている。不登校の児童生徒が通う学校である。私は、2018年10月から不登校特例校の一つである八王子市立高尾山学園の適応教室「やまゆり教室」で、学校サポーターとして児童生徒の学習補助の活動をしている。

やまゆり教室では、小学三年生から中学三年生の不登校児童生徒が在籍している。様々な学年の児童生徒が在籍する為、集団授業の代わりに「学習」の時間が設けられており、各自でドリルやワークを行う。

しかし、やまゆり教室に在籍する多くの児童生徒は毎日学校に通うこと自体が難しく、登校できても45分の授業時間中席につき授業に取り組むことができない。その原因として、長期の欠席による学力の遅れはもちろん、家での生活に慣れたことによる学習習慣及び集中力の欠如が挙げられる。その為学

校復帰には、まず、児童生徒は学校に登校し授業中席についていられるようにしていくことが必要である。

3. 先行研究について

八王子市立高尾山学園やまゆり教室への支援に関して、これまでに高橋(2018)らの「八王子市立高尾山学園のための学習導入ツールの提案⁽²⁾」がある。先行研究では、高尾山学園のやまゆり教室において学習習慣の獲得がうまくいっていないという問題点が挙げられている。長期的な不登校期間は、児童生徒から段階的な知識習得の機会を奪い、結果として学習意欲と継続力を低下させる。そのため、学習時間を含めたサイクルを提案し、そのサイクルをルーティン化することで学習を継続させられると提案した。

しかし、先行研究の「学習の習慣づけ」という観点では児童生徒の学習支援に効果があると考えられるが、実際に集中力が向上したという記載はなく、この方法で、やまゆり教室の児童生徒の為の学習支援につながったのか不明瞭である。したがって本研究では、習慣づけの前段階である集中力の向上という観点で、やまゆり教室に通う児童生徒の自習時間の学習支援を行おうと考えた。

4. 研究内容

やまゆり教室に通う児童生徒の大半は、教員やサポーターが付き切りで学習を促すことで、その間は学習を続けられる。しかし、教員やサポーターの人数は限られている。登校する児童生徒数は日によって異なるが、児童生徒が多い時間だと1人の教員・サポーターで4～5人の児童生徒の様子を見なくてはならない。児童生徒一人につき一人の教員や

サポーターがついていることができない場合が大半である。そのため、何らかの方法で児童生徒自身が自分の席に着き学習を続けようという意識を持たせなければならない。

4.1. アンケートによる現状調査

やまゆり教室で実際に行われている学習場面における児童生徒への対応を調査する為、2019年12月25日に八王子市立高尾山学園に勤務する教員(男性1名女性1名)と1年以上やまゆり教室で児童生徒と関わっているサポーター(男性3名女性2名)計7名を対象にアンケート調査を行った。やまゆり教室での経験をもとにアンケートを作成し、更にやまゆり教室の研究主事の方に見ていただき、意見をいただいた上で改良しアンケート項目を決定した。自由記入形式で、先生方が日頃意識していることや感じることを調査した。

今回の大きく分けて三つのことを調査した。一つ目はやまゆり教室の児童生徒を指導する上での子供達の持つ課題点について、二つ目は学習を続けられない児童生徒にどのような対応を行っているか、三つ目は直に学習をやめてしまう予兆の行動についてである。

4.1.1. 調査結果

やまゆり教室の児童生徒を指導する上での子供達の持つ課題点として、最も多数得られた回答は「他の児童生徒と話をしてしまう」ということだった。集中力が切れ、近くの児童生徒と会話をしてしまう傾向が多くみられるという。

学習を続けることができない児童生徒への対応として、最も多かった回答は「児童生徒へ声をかける」(7名)という回答であった。声をかけると再び学習に向かうことのできる児童生徒が多いため、有効な手段として活用されている。

直に学習をやめてしまう予兆の行動としては、「ボーッとすることがみられる」、「手が止まる時間が長くなっていく」、「体を揺らす行為や周りを気にする様子が多くなる」などが挙げられた。

また、児童生徒が段階的に成長していくために、児童生徒の努力をしっかり評価していくことが大切ということだった。

4.1.2. 考察

今回の調査で、多くの教員やサポーターの先生は生徒の学習を続けさせるために「声がけ」を活用していることがわかった。しかし、教員やサポーターの人数は限られてる。そのため、常時声をかけ続けるということは現実的に難しい。限られた人数の中で対応していくには、児童生徒が自発的に学習することが必要であると考えた。

したがって、今回は児童生徒が学習中に自発的に取り組み、また、集中して学習を続けようという気持ちにさせられるようなアプリケーションを開発する。さらに、「学習を続けることができれば評価する」といった極端な物ではなく、細かな児童生徒の「努力」も評価できるような仕組みを取り入れる。

以上のことから、「体が揺れてくる」という点に着目し、学習できているかの判定を児童生徒の姿勢を元に行うこととする。

5. 開発中のアプリケーションについて

調査結果を元に、児童生徒の姿勢に注目し、自分の意思で席に着き学習を続けることを促すアプリケーションの開発を行おうと考えた。児童生徒は各自の机の上にタブレットまたはスマートフォンを置きアプリケーションを起動した状態で学習を行う。タブレットのアプリケーションを選択した理由は、高尾山学園では学習時におけるITの導入を積極的に行っており、学校に環境が整っている為である。

また、児童生徒の体の動きを検出し、学習が続けられていたらスコアが伸びる仕様とする。これにより、児童生徒に学習を続けようという意識を持たせられると考えた。体の傾きは、児童生徒の装着したアイウェア型のセンサーから取得する。

6. 今後の課題

やまゆり教室の教員およびサポーターに、より効果的なアプリケーションにする為どのような仕様が必要か、児童生徒と接する際にどのようなことに気をつけているのかなどアンケート調査を行う。アプリケーションのプロトタイプが完成後、やまゆり教室の生徒児童に実際に使用してもらい、その結果を元に改良を加えていく。

今回はより正確な値を取得するためにセンサーを用いて判定を行ったが、アイウェアをかけることによる学習者への負担を考慮し、アイウェアを使わない判定も行っていく。また、本研究ではイラストを用いたが、実際の地図(Google Mapsを使用)と連携したアプリケーションの開発も進めている。過去に訪れたことのある場所など、児童生徒が目的地を設定し目的地を目指して学習をする。

7. おわりに

参本稿では、八王子市に設置されている適応教室ではたらく教員及びサポーターにアンケート調査を行い、不登校児童生徒の学習時における問題点と実際に行われている支援について調べ、その調査結果と現在開発中の支援システムについて述べた。

やまゆり教室に通う児童生徒以外にも、全国にたくさん不登校で悩む児童生徒がいる。学校で学べることは、教科書の知識だけではない。

不登校の原因は様々である。原因はどうあれその中には、学校にまた行きたいと考える児童生徒もいる。そのような「学校にまた行きたい」と志す児童生徒が学校に行く「きっかけ」を作ることができるよう、この研究を進めていく。

参考文献

- (1) 文部科学省, “平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査”, <https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>, 参照日 2019年12月10日
- (2) 高橋拓夢, 福永理絵, 佐々木整, 工藤芳彰(2018) 「八王子市立高尾山学園のための学習導入ツールの提案」, 日本デザイン学会第65回春季研究発表大会, https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/65/0/65_180/_article/-char/ja/, 参照 2019年5月1日